



追悼：西島章次先生

神戸大学 経済経営研究所

教授 浜口 伸明

2012年7月29日。いつもと変わらない日曜日の朝に飛び込んできた外務省からの衝撃的な知らせに、私は言葉を失った。西島章次先生が、赴任先のブラジルで現地時間28日の午後4時ごろ、重大な交通事故に遭い、亡くなったというのだ。西島先生は今年4月から神戸大学と外務省の人事交流の一環で在ブラジル日本国大使館の公使に就任し、これから活躍が期待されていた矢先の出来事であった。

西島先生は、1949年兵庫県に生まれ、78年に神戸大学大学院経済学研究科博士課程後期課程を単位修得退学し、神戸大学経済経営研究所助手に採用された。ブラジルを中心にラテンアメリカの経済発展に関する研究を推進し94年に教授に就任。2002年4月から04年3月まで経済経営研究所長を務めた。さらに05年2月から07年2月の間は、神戸大学理事・副学長として全学の教育推進と国際交流に手腕を発揮された。

西島先生は、1990年に出版された編著書『ラテンアメリカのインフレーション』で、ラテンアメリカ構造学派の視点に注目した独創的な議論を展開し、発展途上国研究奨励賞を受賞された。80年代にラテンアメリカで深刻な問題となっていたインフレーションは、賃金や公共料金に物価スライド制が採られて閉鎖的な国内市場で寡占的企業が容易にコストを価格に転嫁するという環境下では、企業と労働者が賃上げと価格引き上げの対立を繰り返すことによって物価上昇自体に強い慣性が働いていると分析し、インフレーションの原因を超過総需要の存在に求める新古典派経済学や通貨の過剰な供給に求めるマネタリストなどの伝統的な経済学の枠組みだけでは、有効な処方箋は描けないと指摘した。この研究は、私がアジア経済研究所の研究員として駆け出しのころにお手伝いしたプロジェクトから生み出されたもので、私にとっても思い出深いものである。その後、93年に出版された『現代ラテンアメリカ経済論－インフレーションと安定化政策－』では、構造学派の分析枠組みを動的に発展させて、ラテンアメリカのような所得格差が激しい社会においては、伝統的な経済学から導かれるマクロ経済調整政策は調整過程において激しい社会的対立をひきおこすため、インフレーションの解決や安定的な経済成長を達成することは困難であることを理論的に解明した。また、経済自由化には望ましい順序があることにいち早く注目し、性急な金融自由化が問題を引き起こすことを明確に指摘した。1990年代にラテンアメリカ経済がインフレーションを克服し経済成長を回復した過程で取られた政策を検

証すると、まさに西島先生の研究が指し示した財政改革や経済自由化などの改革のポイントが重要であったことが証明されたと言える。

その後の西島先生の重要な研究上の貢献の一つは、ピーター・スミス教授（カリフォルニア大学サンディエゴ校）との国際共同研究から生み出された編著書『アジアとラテンアメリカ―新たなパートナーシップの構築』に代表される、オープン・リージョナリズムが発展途上国の経済発展に寄与することを指摘した議論である。その中で西島先生は、アジアとラテンアメリカにおける地域統合の流れを分析しつつ、両地域間の経済交流を深める意義の大きさを指摘した。中国が経済大国化した今日、同研究は正鵠を得た先駆的業績として、英語・スペイン語の翻訳とともに非常に多くの研究者によって引用されている。

最近では、西島先生は、ラテンアメリカで進んだ経済自由化が長期的な経済成長に良い影響を与えているか、という問題に関心を深めておられた。先生はおそらく自身の研究の集大成と位置付けてこの研究に取り組み始めたところで、その成果の一部を私との共著書『ブラジルにおける経済自由化の実証分析』として研究所から出版した。マクロ経済安定化が達成されたブラジルにおいて、これまで実行された経済自由化が、生産性の改善ともなっていたかどうか、および自由化の過程で経済成長の果実の分配のありかたが新たな対立の源泉となって経済成長の持続性を損なうことがないかどうかを、詳細な個票データを用いた実証分析によって検討したものであり、新興市場ブームに沸くブラジル経済の持続可能性を問う新たな地平を切り拓こうとしていた。

このように、西島先生の研究生活を振り返ると、ラテンアメリカを研究対象としながら、経済安定化政策、経済統合、経済自由化が発展途上国の経済に与える影響として一般性のある結論を導き出そうとしていたと言える。これにより、西島先生は、日本におけるラテンアメリカ経済研究の第一人者として確立した地位を築かれただけでなく、経済学の確固たる基礎の上に、地域の固有条件を極めて詳細なレベルで考慮して分析対象とする地域に向き合う真摯な学問的姿勢を慕って、その門下にインド、中国、韓国など様々な国や地域の発展問題を研究する多くの若手研究者が集まった。

研究の傍ら、西島先生は多くのラテンアメリカ経済の入門書や啓蒙書の編集・出版に携わるとともに、神戸大学経済学研究科と国際協力研究科で多数の大学院生の研究を指導にあたるなど、教育面でも多大な貢献があったほか、『世界週報』、『エコノミスト』などの一般誌に優れた論評を提供し、我が国においてラテンアメリカ経済についての理解を深める役割を積極的に果たした。

また、ラテン・アメリカ政経学会や日本ラテンアメリカ学会で多年にわたって理事を務めたことで、学界に対しても顕著な功績があった。殊に、ラテン・アメリカ政経学会では1998年11月から2004年11月にかけて理事長を務めて同学会の発展を先導する役割を果たした。学界の外にあっても、国際協力機構、国際協力銀行、日本貿易振興機構アジア経済研究所、日本経済調査協議会、国際貿易投資研究所などの公的機関における調査事業に携わり、文部科学省科学技術・学術審議会第四期国際委員会臨時委員（2007～2008年度）、ラテンアメリカ協会理事（2008～2011年度）、日伯協会評議員（2008年以降）、神戸市外国語大学経営協議会委員（2007～2011年度）、神戸市国際協力交流センター理事（2007～2011

年度)、財団法人兼松貿易研究基金常務理事(2007年以降)を務めるなど、社会活動でも多面にわたって功績があった。

冒頭で記したように、西島先生は今年4月に在ブラジル日本国大使館の公使として赴任し、3カ月が経過したところであった。大使館では対外的公務のほか、館員を対象にブラジル経済に関する連続講座を主催するなど意欲的に活動し、茶道の先生である奥様とともに、久しぶりのブラジル長期滞在を満喫されていた。5月26日に頂戴したメールでは、次のように充実した近況を綴られていた。

当地は乾季の前のためか緑豊かで気候も過ごしやすく、快適な生活です。ホテル暮らしは2週間と早めに脱出でき、リフォーム直後のきれいなアパートに入居しております。車も1カ月足らずで利用可能となり、大使館まで10分程度です。大使館では結構事務的な仕事もありますが、比較的自由に過ごさせてもらっており、また、専門調査員の方が秘書としてついていてくれますので、大変助かっております。大使、次席公使をはじめ、館員の皆さんとは仲良くして頂いており、楽しく仕事しています。5月に入ってから、私的には「外回りの営業」と呼んでいる各省庁、研究機関などへの挨拶、インタビューに出ており、結構忙しいです。また、5月からは経済班のアタッシュを中心にブラジル経済の講義を始めています。ゼミのようなものですが、今日は大使も参加され、結構盛り上がりました。とくに、昨今の保護主義的な政策と景気刺激策の成否についておもしろい議論となりました。ただ、こんな調子ですので、私の個人的な研究はほとんど手つかずといった状態で、多少、焦り気味です。

さて、家内の方ですが、茶道の大先生という評判が立ち、大使館の内外で茶道の普及に忙しくしています。大使館では大使が自らお点前を披露する茶会を開催するという事で家内が大使に厳しい指導をしており、また、館員のご婦人たちにも着付けや茶道の教室を開いています。また、大使館外では、とある金持ちのブラジル人グループと知り合い、グループの奥様方の豪邸を回り茶道を披露しております。おそらく、危惧していたように家内の方が外交に貢献していることは間違いありません。

こんな調子で、仕事も生活もそれなりに形が出来てまいりましたが、やはり物価が高く、何を食べても、何を買っても値段を気にしなければならないことが難点です。

先生ご夫妻の親しみやすいお人柄も手伝って、大使館の環境にすぐに溶け込んでおられた様子が目に浮かぶようである。それがまさかこんな悲しい結末を迎えようとは、誠に哀惜の念に堪えない。

私にとって、西島先生は長年にわたる学問上の師であり、大学に奉職するきっかけを与えてくださった恩人でもある。また、現職の研究所長として、平素より誠実なお人柄と長年の経験に基づく的確な助言・指導をいただいていた。来年4月以降復職された後は、研究所の将来や今後の共同研究について、教えを請うべきことがまだ山ほどあったし、何より不慮の事故により突然残りの人生を奪われた先生の無念と、硬い絆で結ばれていたご家族の深い悲しみを思うと、万感胸に迫るものがある。

西島先生は8月2日にブラジリア郊外の Jardim Metropolitano 葬儀場で荼毘に付され、心から愛したブラジルの抜けるような青空に旅立って行かれた。享年63歳。ブラジルに出発される前日、奥様といっしょにわざわざ拙宅に挨拶にいらっしゃって、研究所のこと、私に託された学生諸君のこと、学会活動のこと、諸事よろしく頼む、とおっしゃったことを、重く受け止めながら、それを見届けた。